別紙１－１

論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※　甲　第　号

氏　　名　　吉田　彬人

論　文　題　目

Upper extremity disability is associated with pain intensity and grip strength in women with bilateral idiopathic carpal tunnel syndrome

（手根管症候群における上肢能力低下に影響する要因の解析）

論文審査担当者

主　査　　委員　　名古屋大学教授　石黒直樹

委員　　名古屋大学教授　勝野雅央

委員　　名古屋大学教授　若井建志

指導教授　　名古屋大学教授　平田仁

別紙１－２

論文審査の結果の要旨

両側特発性手根管症候群（CTS）を有する女性の上肢能力低下に影響する因子を調査した。上肢能力低下は患者立脚型質問表 Hand10 を用いて評価した。年齢、肥満指数、症状持続期間、手術側、利き手、ばね指の有無、電気生理学的重症度を示す Padua 分類、握力、ピンチ力、Semmes-Weinstein test（SWT）、2 点識別覚検査、日本語短縮版 McGill 痛み質問表（SF-MPQ-J）、痺れの Numerical Rating Scale、うつ性自己評価尺度、短縮版痛みに対する不安症状尺度、心理的ストレス反応尺度も測定した。重回帰分析の結果、CTS 女性の上肢能力低下に影響を及ぼす因子は SF-MPQ-J（$\beta = 0.47, p = 0.00$）と握力（$\beta = -0.34, p = 0.00$）であった。

本研究に対し、以下の点を議論した。

1. 社会的役割を非労働者、主婦、労働者に分類し、Mann-Whitney U 検定を用いて Hand10 スコアを比較した結果、$p = 0.42$ であった。主婦と労働者をまとめ、非労働者と労働者に分類した結果は、$p = 0.90$ であった。
2. 対象は全例手根管開放術を施行予定であり、母指対立再建術例は含まれていなかった。また、涙のしずくサインを確認し、対立不能な対象はいなかったことを確認している。以上より、母指対立機能に大きなバラツキは無かったと考えられる。
3. The Short-Form-36 health survey（SF-36）といった代表的な Quality of life（QOL）評価は実施していない。患者立脚型上肢機能評価票を QOL 評価として用い、考察している先行研究もある（Itsubo et al., J Orthop Sci 2009）。
4. 単変量解析において有意差を認めた項目すべてを含めた重回帰分析の結果は SF-MPQ-J（$\beta = 0.47, p = 0.00$）、自由度調節済み決定係数 $\hat{R}^2 = 0.47$ であった。
5. 両側手術例のうち、初めの手術予定のみを対象とした 45 手 45 例の解析結果は、SF-MPQ-J（$\beta = 0.96, p = 0.01$）、$\hat{R}^2 = 0.43$ であった。

以上の理由により、本研究は博士（医学）の学位を授与するに相応しい価値を有するものと評価した。

別紙2

試験の結果の要旨および担当者

報告番号	※ 甲 第　　号	氏　名	吉田　彬人
試験担当者	主査 石黒 直樹　副査1 勝野 雅央 副査2 若井 建志　指導教授 平田 仁		

（試験の結果の要旨）

主論文についてその内容を詳細に検討し、次の問題について試験を実施した。

1. 社会的役割の影響について
2. 母指対立機能の低下によるピンチ力低下の影響について
3. Quality of life（QOL）評価の実施の必要性について
4. 単変量解析において有意な差を認めた項目の全てを含めた重回帰分析の結果について
5. 両側手術例を考慮した結果について

以上の試験の結果、本人は深い学識と判断力ならびに考察力を有するとともに、手の外科学一般における知識も十分具備していることを認め、学位審査委員合議の上、合格と判断した。